詞花和歌集

詞花和歌集巻第一

春

堀川院御時百首哥奉りける時

ゆきのうちに春たつといふこゝろを

前大僧正覚忠

雪ふかき山のかひより見わたせば
天はら春のかすみこめたり

平忠盛

春のきるかすみのころもたちぬとや
うぐひすさへに谷いでゝなく

源俊頼朝臣

春たつといふばかりにや吉野山
きのふもけふもかすみこめたる

前大僧正

雪こそはいとゞ降まさりつもるらし
春のしるしのかすみだになし

源兼昌

春日野は今日やかすみのたつらんと
若菜つまんと人ぞ知らぬ

源俊頼朝臣

春日野の若菜つみにやいにしへの
ならの都の人は来ぬらん

前大僧正

春日野に若菜つみつゝ万代を
ならの都の人ぞ恋しき

源俊頼朝臣

春日野の若菜つみつゝ万代を
ならの都の人ぞ恋しき

源俊頼朝臣

春日野に

故下をこゑる
のうことのむ乃句のやうそうくうるる

中くうろとうーとるおりの見もの乃さうるうう
源忠季

楊のむ乃芙をうそうる
源兵元忠

楊むもろこそ子代もそうる
天正四年四月廿日会こうる
大中臣朝宣朝臣

さろもれうーちるおもろうおりのてとろう春うろ
大宮大后宮加賀のろうをこさうる時人て源ろうて
つろゆろうるる砂乃うをこの乃
志ろ祇ようろつけ佐ろ
楊むもろくうをもろほるの法を乃ろうこうろ
楊は

佐ゐ見ろ家の法を楊のむ乃
こそこうる
源俊頼朝臣

ろくうもろうろうのうをのそいもろうてそうる
楊とうろ物見のろう源兵元忠
源俊頼朝臣

さろうろくおのうれいおろうれとせくものろとそれ
源兵元忠朝臣の家にて老人惜むことをこうる

芙もれいろれとうみやそのろうろうろうそれ
源兵元忠朝臣

元の楊乃芙を源兵元忠朝臣
ふやとの楊ろれともろ時いくろうこえてそうもろれ
楊のむ乃芙とこそこうる
源俊頼朝臣

夏

卯月の一日よめる

なつごろもきつつなれにしものゆゑに　　法橋行尊

　　郭公を

雲の上をはるかにわたるほととぎす　　和泉式部

　　卯花のもとにて郭公の聞こえけるを

なきとめてかたらふ人もあらなくにうのはなのみしらげにさく

　　郭公を

郭公なきつるかたをながむれば　　伊勢大輔

　　神まつりをよめる

榊とるそのかげさへぞ恋しきや神にあふひをかけてしのべば

　　郭公を

郭公なきつるかたをながむれば　　周防内侍

　　花の歌とてよめる

花ゆゑにおもふこころのいでそめてうきにもものをおもはするかな

　　花の歌とてよめる

春ごとにながめながめてよのなかをうらみてのみもわたるころかな

　　花の歌とてよめる

山ざくらさきにけらしあしひきのやまかすみだちかをみえつつ

　　花の歌とてよめる

今ぞさくらさきにけるいつのまにわがよのうちにはるはきぬらん

　　花の歌とてよめる

山ざくらちるをかぎりとながめつつこころぞともにうつろひにける

　　花の歌とてよめる

ちるをみてあはれとおもへやまざくらわれだにのちにさかんものかは

　　花の歌とてよめる

ちりぬればこひしかるべしやまざくらいまさかりなるいろをみてゆく

　　花の歌とてよめる

ちりちらずきえかへりつつおもほゆるはなのこころはわれのみやなる

　　花の歌とてよめる

ちりぬればのちはあだなるやまざくらさきけるほどはものおもひもなし

　　花の歌とてよめる

山ざくらさきにけるかもあしひきのやまかすみだちかをみえつつ

　　花の歌とてよめる

今ぞさくさきにけるかも

子規のうつりけるころ
大仏の
まつわとおもふともそうるを時ち昭
田中時ちと云ふ事をこゝろ
ゆくともをわふらいそん郭ち
別ちつそ
こその池ふまるかやのちこひくいひくちとのそちつとをれ
土御門右大臣のふこゝろ今一枝ちるを
折枝をくやるあの花のふ
別ちつそ
六月ねのかをゝまこすとうい
花ち院御時ちそゝち寺ちるこゝろ
ちるてもそちこやのちのやう六月ねのそ
右大臣の家乃ち会ふこゝろる
六月ねこゝろるこゝろ
都ちゝ花のちやう花会ふこゝろ
かりやくす五のあふ人井ちへ
為家朝臣家ち会ふこゝろる
六月ねこゝろ
世とそもりをふのそ社をうこゝろ
おちうくそそそちをおりうへ
ちうそこのねそそこそうろる
うすくこくふちりよ旬ふうそこゝろ

大納言為家
侍従雅経郷
法眼源承
法印定家
侍従雅経郷
大納言為家

秋

題しらず　　源兼昌

山城のとけくの雲をとどめてや秋うせやらぬ峰の松風

七月七日よめる　　大納言経信

萩のうへすすきのうへもしらつゆの玉ぬく秋のはつかぜ

七月七日よめる　　前中納言匡房

七夕のとわたるふねのかぢの葉にかきつくしたる秋の初風

秋歌とてよめる　　藤原基俊

ながめやるそなたの雲もあらしふきにけりとよのあきのはつかぜ

題しらず　　源俊頼朝臣

七夕のとわたるふねのかぢの葉にかきつくしたる秋の初風

いくかねてとしこそまちけれ七夕のとわたるふねのかぢのしづくを

秋風の作ればやがてあきぬるをなどかはつかのそらもとまらぬ

天川さざなみよするやかげにてあきたつしるきかぢのしづくを

寛和二年内裏歌合に　　左京大夫道雅

おもふらんこころのほどぞしられぬるかささぬ中の秋のはつかぜ

七夕のこころを　　大中臣能宣朝臣

天川なみたちさわぐこよひこそ舟出する人かぢもとめけれ

橋供給奉仕の後、宇治の山庄にて七夕秋初の心をよめる

従二位頼通卿

ながめやるとよの袖よりはるかぜにあきをしるかな天の川なみ

七夕のまちつる袖のろ〳〵ちとゆふ
別ちそ
天川そ
三条太政大臣の家うて八月十五夜よ
水はやとる月のうけこやこの代を
別ちそ
いうるわいおそ
家之家会
春ちとそやいうける秋の秋乃月
月を御ちてこ
秋之又ちそんあそ
別ちそ
ちとこそちそ
関白おお政大臣の家うて世中こうる
秋のの月乃ひうかる山小おの
ひこの山乃名仕之のろて月とこ
天うけそのこ
垂枝おお政大臣家の家会こうる
秋のの月こんをひろ
関白おお政大臣の家うて八月十五夜
ひろ
右衛門督家成
秋之又ちそんあそ今秋そうお月そこえ
別ちそ
ちとこそちそ
関白おお政大臣の家うて世中こうる
秋のの月乃ひうかる山小おの
ひこの山乃名仕之のろて月とこ
天うけそのこ
垂枝おお政大臣家の家会こうる
秋のの月こんをひろ
関白おお政大臣の家うて八月十五夜
ひろ
右衛門督家成

祝部成仲

源俊頼朝臣

右大将

左衛門督家成

三条院御製

天喜元年内裏

元遍法師

春楽寺

陽明門院加賀

源行宗朝臣

源俊頼朝臣

秋のふけ行くままに月をながめて

月を待ころも秋ふかき

左京大夫

雲のうへの月まちいでてこえ山をこえ

待宵内侍

月落山中といふことをよめる

いづら山のはれて二年ばかりありて

宝治二年内裏歌合に落月

中山雅親卿

ちぎりてもあかぬわかれのありあけの

月をぞ

従五位下

萩のそでや秋をそめつらん

(萩のそでにこそ秋をそめつらめ)

従五位下

狩衣ぬるもの萩のそでにこそ秋のみだれ

大江嘉言

萩のそでや秋をそめつらん

(萩のそでにこそ秋をそめつらめ)

従五位下

秋ぞくらいろをものれうれいかなる

宮内卿

こうのこえ山うけよるわいく秋風ふきぬ

前大納言

萩のそでに秋もやうしのたちそわさもこころ

従三位

秀をこえる

ゆくこころ秋もそこそ山入れのそらとうして

けは物へまうそうさのもりうそ待ちそ

こえる

帝堅法門

秋の花のもとのものをいはやいえんと

ものこころを花にそそけるいろ時本院のさいうえいさんの

もいろうをそ待ちをこえる

権子内親王

九月十三夜二月四日来むといひし事を法師ら我師匠
秋かけてもといふ事の関うんぬんかくかくと月もりのかげ
関白左大臣家歌合
雲うごきてめとまれる白菊のうつろふ色をうつしとは
別当法
今宵又いつくしきものかげをうつしてそうつろふ
菊花
菊うゑしその今さそこうと書初のそうそうたる白きくのも
宮法印大納言白つまで見わ宮とかの神をこそ
隠れ右大臣
関こゆる人ことばやうちのくれかかるころの雲ゐまで
武蔵のむさうのわうぼうの玉こむ山のこなたこそ

こうろ

いくとしとそ秋のあのこうろうれ
雲居元
雲ゐこむこの山とうの名
大納言通房
名にしおはゞ山さとのあるじとやいはまし
秋の夜の月
秋ごとに梅こうろうて住なれし秋の夜月
乃宮法師
こうろをこそうらめ
春夜の月
春夜のおぼろげしゆゑの事をこそ
面影をとゞめし月のこうろかな
隠岐判部
名残こうろとゞめし月の末こそ
月のこうろ
月のこうろ秋の夜こそこうろ
平忠盛

冬

別れを

いつとても袖ぬるる事はあるものを一葉落つの秋の限りにおもふこそうたてなりけれ

秋のころ初雪をよめる

初雪をまちつけてこそ見はてねと思ふ心ぞ冬をしるべ

冬の中の月をよめる

いつしかと秋のあはれをそふるかな月ぞ冬にもなりて立

今はた

別

春立つ日よめる　　一条摂政

うちとけもこそつつむとも一月にうはれとうぐひすぞなく

寛和二年内裏の歌合によめる　　前中納言匡房

春ごとの花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり

題しらず　　左京大夫顕輔

ちぐさにもうつろふ人の心かなうつしもとめぬ花の色かは

題しらず　　大納言忠家

いそのかみふるき都のかたちとてのこれるものは春の山もと

題しらず　　源重之

うぐひすのこゑはかはらぬものからにうつろふ人の色ぞ悲しき

題しらず　　大納言経信

咲けばまづ散りぬるものを桜花いつかは春の心のどけき

題しらず　　平忠盛朝臣

いかにせむ春の山辺にまどひきて帰るべき道を忘れはてぬる

題しらず　　源俊頼朝臣

春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり

題しらず　　左京大夫顕輔

ちぐさにもうつろふ人の心かなうつしもとめぬ花の色かは

題しらず　　大納言忠家

いそのかみふるき都のかたちとてのこれるものは春の山もと

題しらず　　源重之

うぐひすのこゑはかはらぬものからにうつろふ人の色ぞ悲しき

題しらず　　大納言経信

咲けばまづ散りぬるものを桜花いつかは春の心のどけき

題しらず　　平忠盛朝臣

いかにせむ春の山辺にまどひきて帰るべき道を忘れはてぬる

題しらず　　源俊頼朝臣

雜上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

父母安住陸奥ぐそくにまかりくだりけるに
大江朝綱朝臣のもとへ今一度かへるさに
かならずとこそいひやりたりけれども
なほこえずして山にとどまりてよみ
月かくれかたくまちてそのかへるに月入
ぬればつかはしける　大江朝綱朝臣
月かくれかたくまちしかひもなく
月かげつれなくいでにけるかな
返し
世中をてらすものとはおもへども
心のやみをはるけぬるかな
平兼盛
世中をてらすとならば山ざとの
月をばいかがながめざらまし
同じ心を
世中をてらすとならば山ざとの
月をばいかがながめざらまし
平兼盛
月ばかりおもしろきものはなきものを
なにかは人のこひしかるらん
返し
月ばかりおもしろきものなきものを
なにかは人のこひしかるらん
平兼盛
秋ごとにかはらぬものは月なれど
ながむるたびにあはれまされり
返し
秋ごとにかはらぬものは月なれど
ながむるたびにあはれまされり
平兼盛
月をのみながめてあかすころもでに
いくよの秋のかげをやどさん
返し
月をのみながめてあかすころもでに
いくよの秋のかげをやどさん
平兼盛
ながめつつ人のみやこをおもふかな
山の端の月
返し
ながめつつ人のみやこをおもふかな
山の端の月
源順朝臣
さのみやは人のみやこをおもふべき
我が住む里も山ぢかければ
返し　平兼盛朝臣

わくらばのとそちらくそもの原らく月をこそ
　　　

山陰をはうこうなるに宗旭はゐのこ餅
なんど有ける月ぜんと山うこ子の
ろうをうそこそ
ろうくいそのそこ人ゐのせこそ
宗旭も太汉大日宗会こうろ
ゐる
ゐこ旭の周の松そこ下をれそ
つこうろうまそこそもそ
ゐわこそ
ゐわこそに月のもとちくわろ
つろくとゐわこるもと汉れ月もうこそ
別不知
ろく入てするもそこ山のそとこ
ゐひこつくもてとゐるもとこのこ
ろ松上

そのろ
そのものろくこうるのそれともく
月のる男ゐいう男のる五月立の朝上
やろうんうゐこそのろる迎
なるろうそこ凡物ゐくこ
保昌こそ
人もれそ物ゐこそいうこのろうも
ゐる男堅房ろうこのろ女をうれくこる
るのこるゐこそとうとのつこ
ろる
ゐこれ
ゐ

花山院御製

世中をうしもうき物と思ひ入て
　　侘人とこそ山はすみけれ

後京極御製

今はやく行のうきをもうき人とそ
　　思ひ捨てこの世をもうく

和泉式部

行末はとをき山のうき物と人のうけゆく
　　つのくにこそとゝめおきけれ

後鳥羽院

ひとつ木の山ほとゝきすうきものと
　　思ひ入ぬる身をもなかめよ

権二条院讃岐

うき事をおもひ入ぬる身をもなを
　　まつ物とてもつる物かな

二条院讃岐

うきをしるうきてあるうちのもうき夫のつく

うきにはのゆうてこゆるうき秋のそのこゝろのうき草をほ
こゆるうそうてこゆるうき物をこそ
陸奥国の住人そのゝうき秋のうきなる

長根うのくをうゝる

うくとくとうきねうゝねうゝ
世よそつゝて住うき秋寿りの
ありのうき年をこそうゝる

うれうつうきの末えのうゝ
ゆうの末ゝ行うゝ時ゝうゝ

平政範

権大納言伊房

左京大夫顕輔

うの御方のうちこゝかしこにて手
堀川院御時百首たてまつりける
為のうへにてあふことをまつ
加賀左衛門
如来のうちわといふことのこゝろを
野辺にて
今はゝもうそつくとやいはん
大納言師頼
小池水ぬるほのかなる酒うへて芳野
大蔵卿匡房
きそ枝むすぶとも見ゆ
野辺にて
別れても
大納言行通

如来のいふこともうこゝろにくらゐすみ
釈教の体にて百首よみ侍りける
いとのそれにまかこゝろにおもひ
治承三年四月
神祇伯顕仲卿四首会にまかりて
とこしへにわかつ
述懐といへる事を読て
左兵衛佐局
ちゝはゝのせゝりやとりつきそうろう

雑下

大江為基卿

うくひすのそれかとばかりなきつるはやこのことをつくるなりけり

沖被仰仲

こゑうつる月をうれしとおもふらんやどはなれたる人ぞ

源通時朝臣

ふるさとの春のうぐひすなきつれどいかにとはまし人ぞ

赤染衛門

うけひとゝ初るかぎりてこそうめんとそうるうぐひすの

なくをきゝつゝ

大江為基朝臣

けふこゝに又うぐひすのなりくるはいかにとはまし人ぞ

源通時朝臣

人のもとをとふにそへてうぐひすのなくをきゝつゝ

けふをわもうぐひすとともなきてとはまし人ぞ

赤染衛門

ふるさとゝてものこりけるうめのはなの

大江為基

世中のひとあつろ乃つうきを
そ〻ろ久ゐ寺ゐ

此奥書者在校本之写
悉皆朱書之校返而校了

永祿丁卯仲春日　城西林塵庵

右仙茎什家本之写了

天明三年孟秋　裏凡子